

堀合先生に学ぶ(4)

保育者の関わり

立川 多恵子

十文字幼稚園には、三年保育のクラスが二つある。その一つが堀合先生の担当する「すみれ組」であり、他は川端先生が担当する「たんぼぼ組」である。

「うちのクラスの子どもは落ち着きがなくて……」という川端先生の悩みを聞いてから二週間ばかりたったある日、私は再び十文字幼稚園を訪ねた。

堀合「たんぼぼ組、少し変わりましたでしょう」
立川「そうですね、子どもがよく遊べるようになりましたね。先日たんぼぼ組を見せていただいた時は、先生の手が八本なければ足りないと思ったほどでしたが……」
堀合「川端先生の保育が少し変わったのです。先生はとても優しい方です。それに声がきれいなんですが、その声が子どもの頭の上を通り過ぎてし

まっていたようです。」

そこで今回は保育者の関わりについて、まず「優しいということ」と「声が子どもの頭の上を通り過ぎる」ということから考えてみたい。

優しいということ

実際保育している川端先生を見ると、お姉さんのように優しい。

しかし、子どもに優しくしようと心がけるあまりに、子どもの行為のすべてを受け入れようとして果たされず悩むことが多い。堀合先生は川端先生に「子どもを叱ってもいいのですよ、子どもだって先生に叱られたいと思うことがあるのですから」と話していた。

保育者は子どもが早く園生活に馴れて欲しいと願って、自分自身の感情を押し殺してまで優しく受け入れようとする。ところがそうした保育者の態度が子どもに取って欲求不満のもとになること

もある。

四月、母親から離れて園生活を始めた子どもは、まずよりどころを先生に求める。中には何を始めるにしても心配そうに先生の方を見て行動する子もいる。例えばテーブルの上のクレヨンを使うおうとする時でも、先生の顔を見て、先生が頷いてくれると安心してクレヨンを取り出し、絵を描き始める。

子どもがやろうとすることをできるだけ容認して行くことは、入園当初の保育者にとって重要な仕事である。そのうち子どもたちは「幼稚園では何でもやれそう」といった自由感を感じ始める。そして積極的に遊び出す。そうになると、時には保育者にとって困ることも起こる。

子どもの主体的な活動を尊重するためには、自由感のあることはたしかに大切であるが、園生活の自由は無制限ではない。また制限があることでかえって子どもが安定することもある。堀合先生

は子どもと生活する中で、「望ましいと思うこと」はほめ、「困ると思うこと」については、はっきり「困る」ということも必要であると考え

る。
「俊夫ちゃんそれはなしよ」と言う堀合先生の声がする。俊夫が積木を足で蹴っ飛ばしたからである。俊夫の始める遊びはなかなか面白いが、時には私が「あれっ」と思うようなこともする。そんな時先生はしっかりした口調で叱る。自発的に遊べるようになった子どもについては、堀合先生は保育者が困ると思うことは遠慮なく、「何が困るか」ははっきりと伝えて行く必要があると言う。

川端先生は優しいが、その点かはっきりしなかったので、子どもたちが混乱してしまっただ。堀合先生は川端先生に子どもに対して、もつと自分の気持ちをはっきり表現したほうがよいと助言する。子どもを受け取めるということは一人ひとりの子どもに先生が心をこめて対応していく

ことであり、その結果叱ることがあるのは当然だと考える。

たしかに子どもも親身になって対応してくれる保育者がいて初めて「困ったらきつと助けてくれ



る」といった安心感が生まれ、信頼関係が確立すると言えよう。

2、声が頭の上を通る

川端先生は声が細くて美しい。しかし世の中には声はやたらに大きいのに、言葉がはっきりしない人もある。その反対に声は小さいが、心に感じる言葉話す人もいる。

「先生の声が頭の上を通る」といった表現は単に物理的な現象を言うのではなく、もっと心理的なものを表現している。

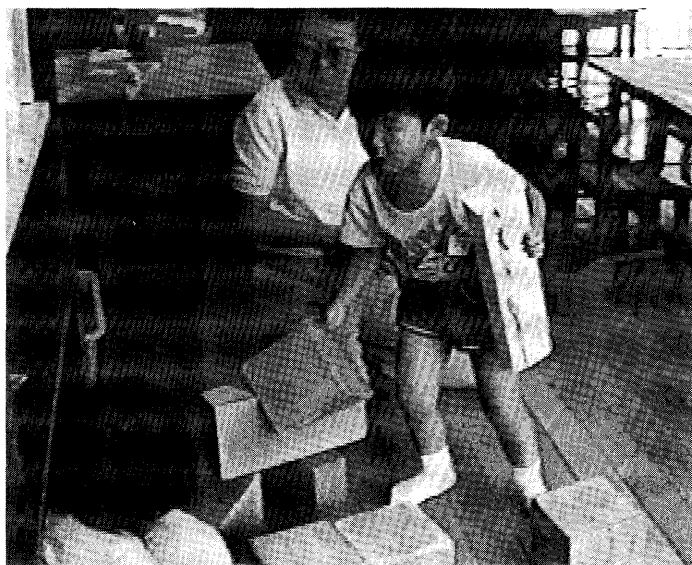
川端先生はこの春、十七人の三歳児を担当して、今年こそしっかり保育しようと考えた。そこで保育室や園庭をこまめに走り回って子どもを求めた。私がかんぽ組の保育室を覗いて「川端先生は手が八本必要」といった感想を持ったのはそのためである。十七人の子どもに要求に応えようとすればするほど、忙しく走り

まわることになる。

とかく私達は子どもの要求に性急に応えようと、言葉で対応することが多い。そのため先生の声が子どもの頭の上を通り過ぎることになる。もっと一人の子とじっくり関わることが必要である。子どもとの関係を大切にすると、「先生の声が子どもの頭を通り過ぎる」ことにはならない。そのためにはどうすればよいか、それが難しい。

今朝、川端先生は堀合先生から「あんな時はしっかり愛ちゃんに関わってあげることが必要よ」と言ったアドバイスを受けていたが、どの子の要求にでも応えようとすると、なかなか一人ひとりに丁寧に関わることができなくなる。そのため肝心な時に子どもの世話を第三者にゆだねなければならぬことも起こる。

堀合先生は子どもとの信頼関係が確立するまでは、担任が自分の手でしっかりと子どもに世話をすることが必要であると強調する。そういえば先



生は私が手伝おうとした時、とても遠慮した。それは遠慮というより「今は手を出されては困る」ということだったのだろう。

最近堀合先生の保育を見ていて感じたことがある。先生は困ると思うことについて、率直に言葉や態度に表現して伝えているが、叱ったすぐ後でも、その子のよいところを見つけると、ほめたり、認めたりしている。

積木を足で蹴っ飛ばし、堀合先生から「それはなしよ」と叱られた俊夫の場合もそのあとすぐ、積木を沢山使って工夫して車庫を作り上げた時「車はここから入れるのね、よく考えたわね」とほめられた。俊夫はすっかり得意になって、先生にいろいろ車の入れ方を説明していた。

先生に「自分が努力して作ったものを認めて貰える」ことぐらい子どもにとって張り合いのあることはない。先生が一人ひとりの子どもとしっかり出会うことを大切にしていると、子どもの側に

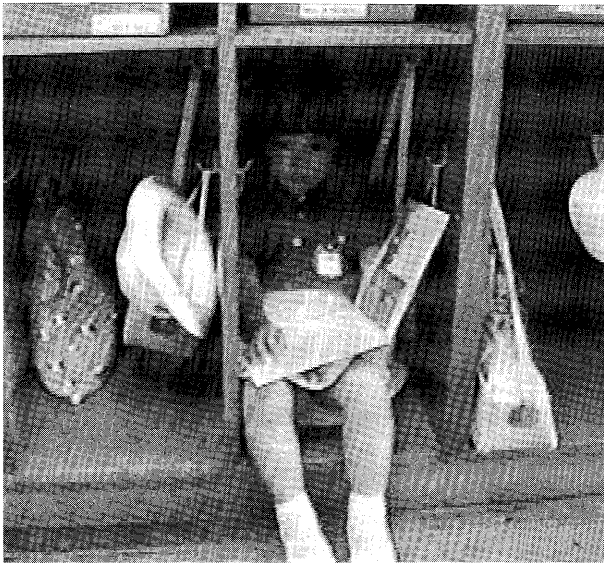
立ったさまざまな対応の仕方が生まれる。それが
ある時は叱責だったりある時は承認だったりす
る。保育者の関わりは叱ったら、次はほめると
いった技術的なものではない。

3、子どもの側に立って考える

あかりは入園してしばらくすると、自分のロッ
カーの中にもぐり込んで絵本を読んだり、友達
遊んでいるのを見るようになった。入園して一
月くらいしてからのことなので、私は園生活に少
し馴れたところで自分の場をロッカーの中に求
めることができたのだろうと考えた。

降園時間になると、先生が「あら晴ちゃんまだ
帰ってこない」と言う。あかりはその言葉を合図
のようにして、早速ロッカーから出て来て園庭に
飛び出す。そしてしばらくすると、必ず晴彦を連
れて戻ってくる。

堀合先生も始めは「あら助かる」と思っていた



が、それが毎日続くので少し考えてしまったようだ。先生は私に「先日、みゆきちゃんが晴彦ちゃんを迎えに行ってくれたのでほめたら、それをあかりちゃんが聞いていたのか、翌日からあかりちゃんが晴彦ちゃんを迎えに行くようになったのです。私も初めのうちは『嬉しい、あかりちゃん』が動き出した』と思っていたのですが、先生にはめられるから『迎えに行く』というようなことが子どもに定着するのはよくないと考えて、近頃はあまりほめないことにしているのです」と言われた。

あかりはこれまでも「もうおかたづけね」という先生の言葉に敏感に反応して、先生の傍でせつせとかたづけたりしていた。あかりの場合は自分から積極的に遊ぶことは出来ないが、先生から課題が出されれば、その活動に加わることができ。そんな時、晴彦を迎えに行くという役割が見つかり、勇んで行動を起こしたのだろう。

堀合先生は「ほめられるからやる」といった他律的な行動パターンを助長する機会を子どもに与えたくないと考えているのだ。

その日私はあかりの後を追って園庭に出てみた。あかりは下靴に履き替えると、迷わず園庭の反対側の隅にある砂場に急ぐ。あかりはきつと晴彦が何時もその砂場で遊んでいるのを知っているのだろう。砂場で晴彦に出会うと、あかりは無表情な顔で「もうおかえりよ」と言う。晴彦の方はまだ遊んでいたのか、「今日はおかえりなし!」と叫ぶ。私が晴彦を迎えに行ったのだから、彼の手を握って、早速保育室に連れて帰るのだが、あかりはそうしない。晴彦が池に水を入れたりしながら、遊び続けているのを傍でじっと見ている。

そのうち晴彦が自分からやめて、保育室の方に歩き出すと、あかりは晴彦の後をついて行く。晴彦が途中で園庭にしゃがみこみ園庭の砂で山を作

り始めると、あかりもしゃがみこんでそれを眺めている。そのうち、あかりもその山に白砂をかけた。晴彦が納得したのかやめて立ち上がる。あかりも立ち上がる。晴彦が保育室に向かって走ると、あかりも後を追って走る。

保育室の前のテラスには、堀合先生が迎えに出ている。晴彦はその先生に歓迎されて、抱かれて保育室に入る。あかりはその横をそっと通って椅子に腰掛ける。

晴彦の気持ちに寄り添いながら保育室まで誘導するあかりの姿を見て、私は頭が下がる思いがした。このことを放課後堀合先生に報告すると、先生は「そうなんです。他の人も同じようなことを伝えてくれました。毎日一生懸命迎えてくれるのです。考えてみると、あかりにとって大事な経験かもしれませんね」と言った。

晴彦のお迎えは、あかりにとって楽しい経験ではないかと思う。たしかにあかりが晴彦のお迎え

を始めたきっかけは、先生にほめられたと思ったのかもかもしれないが、実際に晴彦を迎えに行ってみて、晴彦と行動する楽しさを経験し、それがあかりにとって結構充実した時間になったのではないか、したがってあかり自身にとって、そのひとときは重要な時であったにちがいない。

(十文字女子短期大学)